

暑寒別・天売・焼尻の自然

— 暑寒別天売焼尻国定公園 —

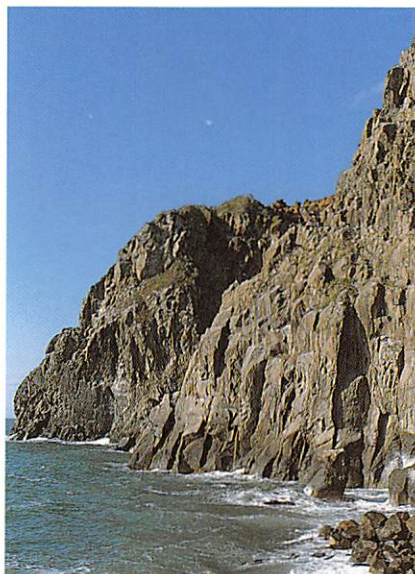


1996

北海道自然保護協会

暑寒別・天売・焼尻の自然

— 暑寒別天売焼尻国定公園 —



北海道自然保護協会

表紙 雨竜沼湿原
扉 雄冬海岸
公園の紹介 焼尻島より利尻島

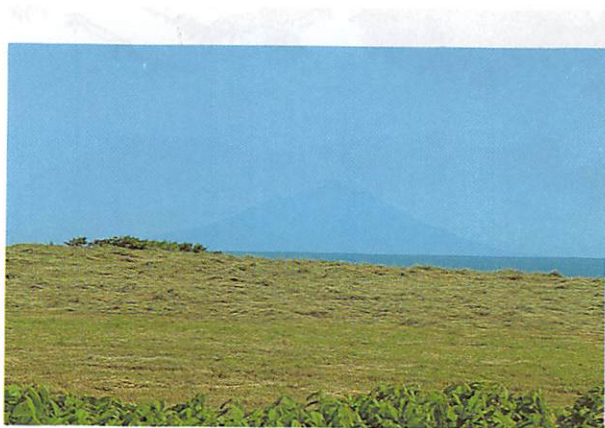
暑寒別天売焼尻国定公園

暑寒別天売焼尻国定公園は1990（平成2）年に指定されました。この公園は1962（昭和37）年に指定されていた暑寒別道立自然公園と、その2年後、1964（昭和39）年に指定された天売焼尻道立自然公園を統合して国定公園になったものです。

増毛山地は、暑寒別岳（1491m）をはじめ、群別岳、浜益御殿、雄冬岳などの山岳。季節ともなればあまたの花々で埋められる雨竜沼湿原。またこれら山々の西側は日本海にむかって急傾斜となり、厚田海岸、さらに浜益から雄冬にかけては見事な海蝕崖がつづきます。自然が造り上げた傑作のひとつといえる地域です。

天売（てうり）島と焼尻（やぎしり）島は羽幌の西、日本海上に浮かぶ小さなふたごの島です。天売島の西海岸は息を飲む海蝕崖となり、オロロン島と呼ばれるウミガラス、ウミネコ、ケイマフリなどの海鳥が雛を育てに集まります。焼尻島は緑濃い自然の林で覆われ、イチイ、ミズナラ、アカエゾマツなどの美しい林がよく保たれております。

個性あるふたつの島と、広い湿原や海からそそりたつ山岳域からなるこの国定公園は、豊かな自然景観に恵まれた公園といえます。



推薦のことは

北海道は、雄大な山岳とそこに広がる深い原生林、広大な湿原や湖沼群、そして大空を飛ぶ鳥や悠々と生きる獣たちなど、北国らしい豊かな自然に恵まれており、六つの国立公園、五つの国定公園、十二の道立自然公園を持っています。

「暑寒別・雨竜沼・天売・焼尻の自然」は、こうした自然公園のうち平成2年8月に全国で55番目に指定された最も新しい国定公園である暑寒別天売焼尻国定公園を紹介したもので、自然公園ガイドブックのシリーズとして4冊目となります。

暑寒別天売焼尻国定公園は、山地の湿原としては国内でも有数の規模を誇る雨竜沼湿原や日本海海岸部の百メートルを超す海蝕崖（かいしょくがい）、ウミネコやウミガラス（オロロン鳥）などの海鳥が繁殖する天売島、約5万本のイチイ（オンコ）を中心に見事な自然林を形成している焼尻島など、様々な特徴ある区域を含んだ公園です。

優れた自然環境は豊かな人間生活の基盤であり、私たちに様々な恵みをもたらす資源でもあります。この北海道の優れた環境をより良いものへと発展させ、未来の世代に引き継いでいくために、私たち一人ひとりが自分たちの暮らしを見つめ直し、環境重視型の地域社会づくりを進めることが大切だと思います。

このガイドブックが多くの皆さんに愛読され、北海道の自然について理解と関心を一層深めるきっかけとなるよう、心から願っています。

北海道知事 堀 達也



暑寒別岳



ウミネコ

西海岸地帯の豊かな自然・暑寒別天売焼尻国定公園

北海道の地図を開いてみると、太平洋沿岸には砂浜海岸が多いのに、日本海沿岸は断崖や岩浜地形の多いことに気づきます。アイヌの人たちは、その違いについて次のようなほほえましい伝説を残しています。「天地を創造したコタンカラカムイという神様が、最後の海岸線の整理を、西海岸は女の神様に、東海岸は男の神様に命じた。男の神様は黙々と仕事を続けたが、女の神様は途中で友人と出会い、おしゃべりばかりしていたので、仕事がかどらず、西海岸には荒々しい断崖が多く残ってしまったのだ。」(更科源蔵『アイヌ伝説集』)

暑寒別天売焼尻国定公園は、その西海岸地域にあり、暑寒別山地の西側は荒々しい断崖となって日本海に臨み、日本海上には天売、焼尻の離島があります。この地域はニシン漁などで北海道としては古くから開けましたが、陸上交通の便には恵まれず「陸の孤島」と呼ばれたこともありました。しかし、そのことが豊かな自然環境を温存してきたことにも連なります。

この本で紹介されているように暑寒別天売焼尻国定公園は、特異な誇るべき自然に恵まれています。しかし、最近では天売島のオロロン鳥が激減したり、雨竜沼湿原が乾燥化への道をたどるなど、憂慮すべき事態も進行しています。一人でも多くの方々が、暑寒別天売焼尻の自然を知り、自然の大切さを理解してほしいと願っています。

この本を作るに当たっては、北海道、前田一步園財団、自然保護助成基金から、ご助成いただきましたことにお礼を申し上げます。

北海道自然保護協会会長 俵 浩 三

目 次

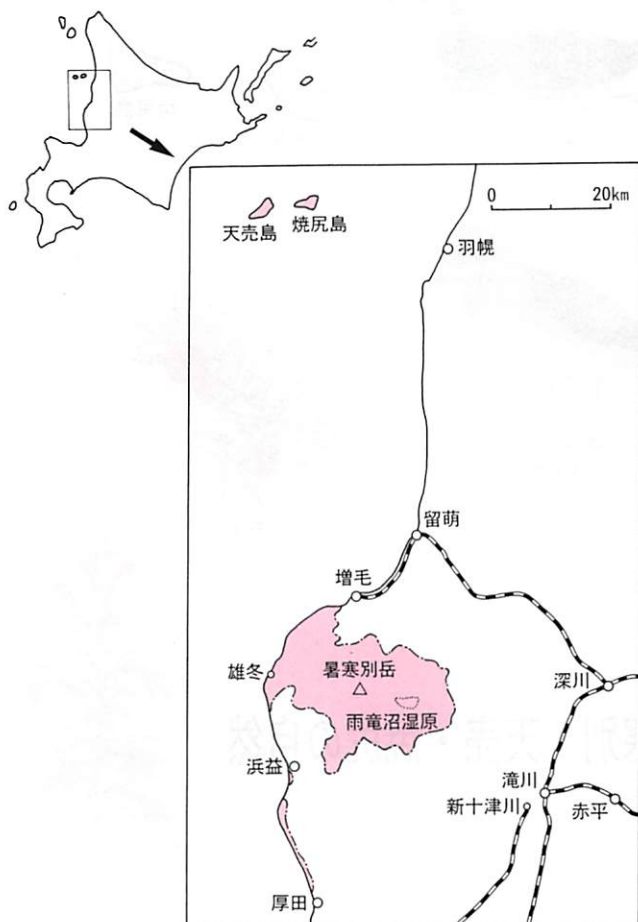
火山と湿原・日本海の双子島	八木 健三…………… 4
「天売島」－海鳥の楽園の今	寺沢 孝毅……………14
花のパレット・雨竜沼湿原	佐々木純一……………22
昆虫たちの世界	久万田敏夫……………32
島の水と森づくり	東 三郎……………38
暑寒別川の魚たち	大久保進一……………45
草と樹	鮫島惇一郎……………54
イラストマップ	村野 道子…………… 2



白竜の滝



天売島の千鳥ヶ浦



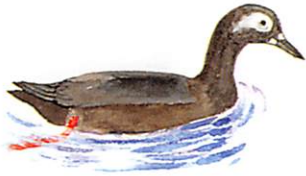


ウミガラス



ウミネコ

チシマエンレイソウ
(オオバナノエンレイソウの一変種)



ケイマフリ



天売島



焼尻島



ウトウ



イチイ



オオバタチツボスミレ

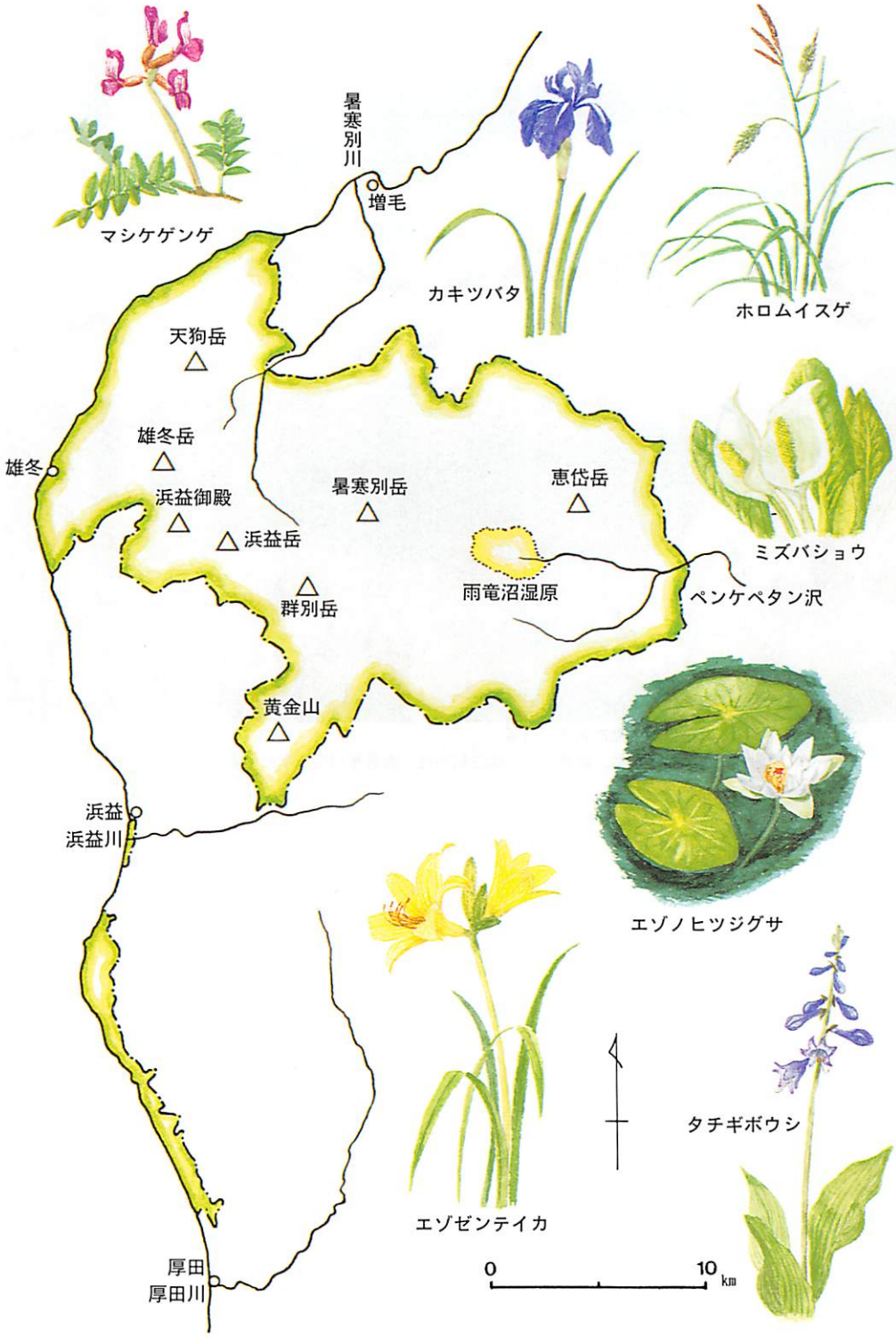
暑寒別・天売・焼尻の自然



サワギキョウ



ヒメシャクナゲ



マシケゲンゲ

暑寒別川
増毛

天狗岳
△

雄冬

雄冬岳
△

浜益御殿
△

暑寒別岳
△

恵岱岳
△

浜益岳
△

雨竜沼湿原

群別岳
△

黄金山
△

浜益
浜益川

厚田
厚田川

カキツバタ

ホロムイソゲ

ミズバショウ

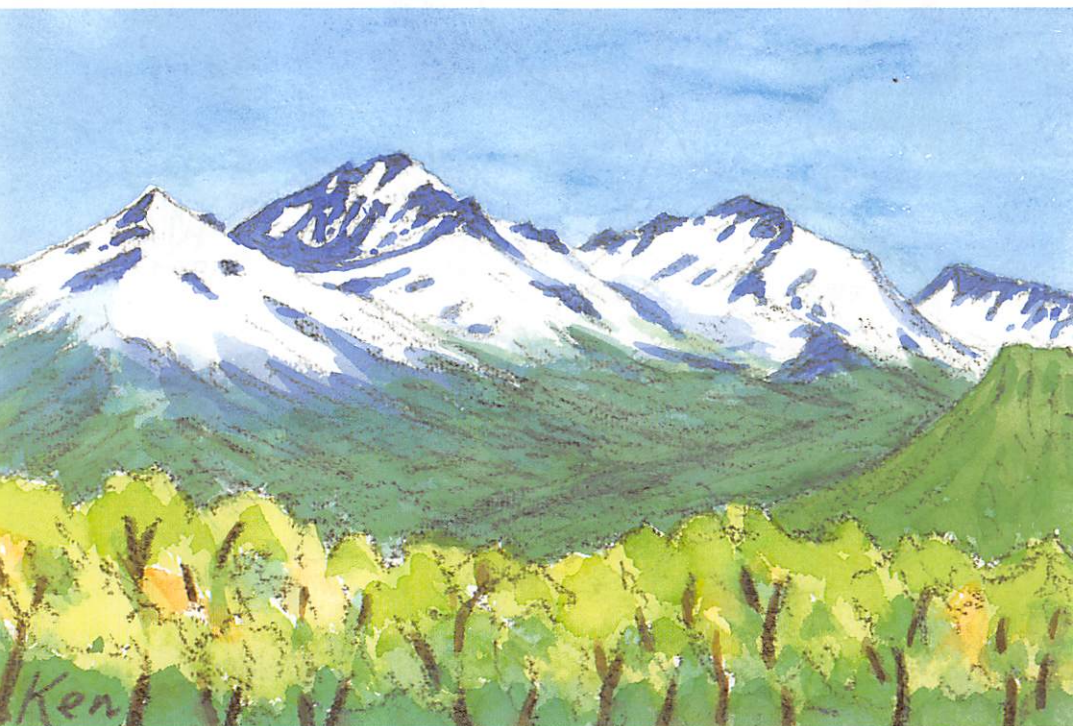
ペンケペタン沢

エゾノヒツジグサ

エゾゼンテイカ

タチギボウシ





浜益村から見た暑寒別連峯
左から群別岳、暑寒別岳、尾白利加岳、南暑寒別岳、手前 黄金山

火山と湿原・日本海の双子島

八木 健三

暑寒別・天売・焼尻国定公園は、暑寒別岳を中心とする山岳地域（樺戸地域）と、日本海に浮かぶ天売島と焼尻島の双子の島からなっています。もともとは暑寒別と天売・焼尻の2つの道立自然公園だったのを、国定公園への昇格を目指した北海道の委嘱を受け、北海道自然保護協会が1984年に地質、動物、植物の調査を行いました。その6年後、1990年に両者を合わせて、暑寒別・天売・焼尻国定公園が指定されたときは、私たちもたいへん嬉しく思ったものです。

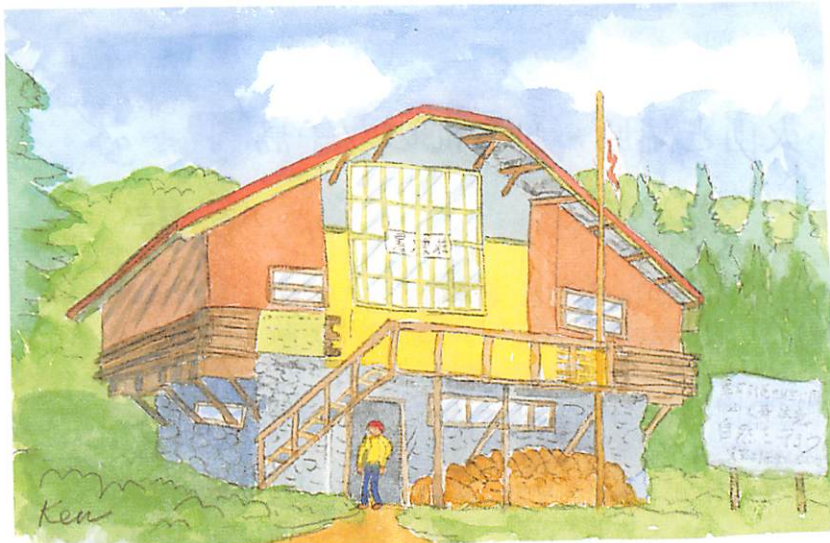
両地域は80kmも離れていますが、地質学的にはともに日本海にそうグリーンタフ地域の最も西にある礼文・樺戸帯に属しており、白亜紀の基盤のうえに第三紀以降の火山活動が盛んにおこなわれた舞台だったという共通点があるのです。

ここには様々な火山があり、また日本海の手蝕による種々の地形、断崖や岩礁がつくられています。それらについて述べて見ましょう。

暑寒別岳火山群

暑寒別岳は標高1491.4m、西部北海道では最高峰の火山です。遠く札幌や小樽からも石狩湾を越えて眺められます。一番素晴らしいのは浜益村の送毛山道の毘沙別展望台からの眺めで、5月新緑の林の上に、暑寒別岳、群別岳や南暑寒別岳の連峰が残雪に輝いているのを見た感激は忘れられません。なおそこからは浜益岳や雄冬岳の雄大なスロープが、日本海に下っていく光景も眺められます。

暑寒別岳に登るには、増毛の南の山小屋暑寒荘から登るコースと、アプローチは長いけれど東の雨竜町の南暑寒荘から、雨竜湿原を見て南暑寒別岳をこえていくコースがあります。頂上は平坦な草地で、所々に安山岩の溶岩流がみられ、頂上の西方には、角閃石安山岩の小高い円頂丘があります。また頂上から南東に約3km尾根を行くと、南暑寒別岳が聳えています。



増毛町の暑寒荘

ともに角閃石や輝石を含む安山岩ですが、カンラン石や黒雲母を含むものもあります。有珠山や大雪などの火山をつくる安山岩が主に輝石安山岩であるのに較べて、ややアルカリに富んでいるためで、礼文・樺戸帯の火山岩の特徴を示すものと言えましょう。

暑寒別火山群は全体として侵蝕が甚だしく、火口も見られず、元の構造は明らかではありません。

さらに南暑寒別岳の東方8 kmには平らな頂をもつ恵岱岳が聳え、その西に広がる玄武岩の溶岩台地の上には雨竜沼の湿原があります。湿原から流れ出すペンケペタン川が玄武岩の断崖にかかっているのが白竜の滝で、この公園で最も見事な滝です。玄武岩は黄色のカンラン石の斑晶が特徴的です。



暑寒荘から見た暑寒別岳

火山活動の時代を決めるために、これらの溶岩について、カリウム-アルゴン法（岩石が出来た年代を決めるひとつの解析法）で求めた年代は次のようです（八木他 1987）。

暑寒別岳安山岩 207±20万年

南暑寒別岳安山岩 312±14万年

恵岱岳玄武岩 317±24万年

この順序は野外調査の結果とも一致し、暑寒別火山群が200-300万年前、第四紀（170万年以後）より僅か前、第三紀末に活動したことを示しています。

最近井尻氏（1995）は「暑寒別岳は奈良の二上山などと同じく、古い火山岩が侵蝕で残った地形であって、火山ではない」という説を出しました。しかし、暑寒別岳の年代は、第三紀中頃の二上山よりはるかに若く、侵食による残丘とは考えがたく、火山地形の明かな恵岱岳に続いて活動した火山であると結論されます。



白竜の滝



雨竜沼湿原 後は南暑寒別岳

雨竜沼湿原

雨竜沼湿原は恵岱岳溶岩流の標高900mの平坦面にあり、東西2km、南北1kmのひょうたん型をしています。高山にある湿原としては、大雪の沼の原湿原を抜き、北海道で最大なものです。

150程の大小の池澇が分布し、いくつかには浮島があり、人が乗れる程大きなものも見られます。浮島の下部は多孔質の泥炭からなり、その上にヨシなどの植物が繁茂し、その構造は池澇の岸と同じです。何らかの理由で底から切り離された岸の一部が、岸から分かれて漂い出したのでしょう。釧路、サロベツの湿原には浮島は見られません。



浮島 下部は泥炭からなる



すっかり水の枯れた池漥

池漥には水が満ちていますが、まれには全然水がなく、泥炭層の露出したものもあり、ミズバショウなどが生えています。水が無くなったのは何故でしょうか。夏の終わりにはタチギボウシの群落が一面に紫色のジュウタンを広げたように咲き誇っています。

1980年代の終わりころ、恵岱岳にスキー場建設の計画が出され、私たちは湿原の自然破壊を心配して反対運動をしました。幸いにしてバブル崩壊でこの計画も撤回されたのは何よりでした。



31 Aug '84

Ken

湿原での昼食



雄冬滝と安山岩の岩脈

雄冬岬

雄冬岳が日本海に落ちるところに雄冬岬があります。ここには柱状節理のよく発達した浜益玄武岩の溶岩流が広がり、その上に火砕岩がおおっております。そしてこれらを一貫く安山岩の岩脈がよく観察されます。そこに掛かっている雄冬滝は、白竜の滝ほど大きくありませんが、雄冬岬で一服するドライバー達にはさわやかな印象を与えるでしょう。

ここを一貫く雄冬トンネルによって雄冬部落は「陸の孤島」の悩みから開放されました。これは開発局の立派な業績と言えるでしょう。しかしそうした意義のある道路の建設も、北海道では大体終わったのではないのでしょうか。

その他に増毛町から浜益村にかけて、カムイェト岬、日方岬、千代志別などで、見事な海蝕地形が見られますが、狩場茂津多・檜山道立公園で見る親子熊のような、傑作な岩体にはお目に掛かりません。

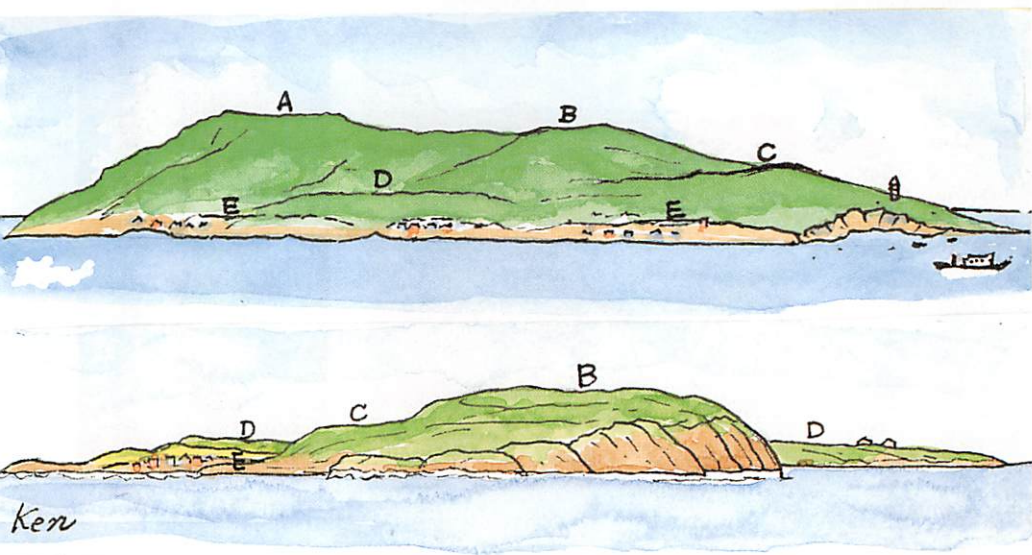
浜益村の送毛山道からの展望については、先に述べましたが、この山道にそって「千本ナラ」と呼ぶミズナラの大木が3本見られます。いずれも直径2m程、樹齢は800年と記され、沢山の枝を天にむけて拡げているのは壮観です。



雄冬トンネル



ミズナラの大木・千本なら



上：天売島の海成段丘（焼尻島から見る）
 下：焼尻島の海成段丘（天売島から見る）

天売島・焼尻島

天売島と焼尻島はともに長径4km、一周する道路が12kmでほぼ同じ位の大きさですが、高度は天売島は184.5m、焼尻島は94mです。武蔵水道によって隔てられていますが、地質は同じ第三紀の安山岩溶岩と火砕岩が重なりあって構成されています。

また海成段丘がよく発達し、秦氏（1960）により、天売島では次のように分けられています。

- A面 160-170m
- B面 80-100m
- C面 60-75m
- D面 40-55m
- E面 20-40m

焼尻島は高度が低いので、A面は欠けて他の4つの面がみられます。



天売港風景「天売駅」とあるのが面白い



千鳥が浦の絶壁



赤岩に飛び交う海鳥



愛鳥の碑

天売島は北と西の海岸に海蝕地形がよく発達し、千鳥が浦などには100mに及ぶ断崖が海に臨み、白い荒波が砕けています。島のシンボルの赤岩では、赤色の火砕岩をはさむ高い岩塔が海からそそり立ち、そのまわりに無数の海鳥が飛び交っているのはまことに壮観です。まわりの斜面には何万を数えるウトウの巣があり、夕方ともなると魚をくわえたウトウが戻って来ますが、どうやって間違えずに自分の巣を捜し当てるのか不思議です。このように天売島はオロロン鳥、ウミウ、ウトウ、ケイマフリなど、海鳥の楽園と呼ばれ、島の港の上に「愛鳥の碑」が建てられています。

天売島の夕陽

オンコの荘



これに対して焼尻島は島の大部分が砂浜でとりかこまれ、断崖は西の鷹の巣の岸壁のみです。南海岸の白浜では、火砕岩の風化で分離した輝石の結晶が見られ、またその段丘には高師小僧が産出します。

島の東にはイチイ、ミズナラ、イタヤカエデなどの自然林がひろく分布し、雲雀が丘、うぐいす谷、オンコの荘などと呼ばれています。オンコ（イチイ）は強い風の影響で樹高が伸びず、枝を左右に広げるのが特徴で、高さ1.5mで直径10mにも広がったものが「オンコの荘」には群生しており、天然記念物に指定されています。

また島の中央の草原には、顔の黒いサフォーク種の羊の牧場があり、一寸ニュージーランド風景を思わせます。ただし羊の数は三桁くらい少ないけれど。

同じ地質なのに、天売島には地下水がわずかで、焼尻島ではたいへん豊富に湧出するのは、自然林の存在によるのであろうと言われています。島の人々もその保護に力を合わせています。

私たちが1984年10月の始め調査に出掛けようとしたときは、ひどい時化で3日間羽幌で足止めをくらいましたが、下旬に出掛けたときは3日間快晴に恵まれ、調査を完了することができました。たいへん親切にして下さった2つの島の人々に感謝します。



焼尻島の鷹の巣



羊の放牧場

文 献

- 井尻正二 (1995) 「ニワトリが先か、タマゴが先か」 大月書店
秦 光男 (1960) 5万分の1地質図幅「焼尻島」同説明書、地質調査所
八木健三・柴田賢・蟹沢聡史 (1987) 北海道西部の暑寒別岳地域火山岩類の
K-Ar年代 火山 第2集 32,366.



ウミガラスの親と巣立つ直前の雛

『天売島』－海鳥の楽園の今

寺沢 孝毅

人間と海鳥の「共生の島」

天売島は周囲約12kmの小島で、羽幌から約27km沖合の日本海に浮かびます。北海道本島に面した東海岸に約500人が住み、高さ100m以上の断崖が続く西海岸に、8種類百万羽近くの家鳥が繁殖のために訪れます。

天売島に初めて倭人が住みついたのは江戸時代で、ニシンなどの豊富な資源に目をつけてでした。それまで天売島は、ほとんど人間の力が及ばない「海鳥の楽園」だったに違いありません。以来、200年にわたって人間が定住し続けているのです。

これだけ多くの海鳥が繁殖するこの規模の島に、人間が生活を営んでいる例は世界的にほとんどなく、その意味で貴重な「共生の島」といえます。でも、人間の影響で、海鳥に近年様々な変化が現れているのも事実です。

空から見た天売島



天売島の赤岩





魚をくわえて持ち帰るウミガラス

絶滅寸前のウミガラス（オロロン鳥）

天売島と聞けば、何よりも先にオロロン鳥を連想する人は少なくないでしょう。オロロン鳥は正式名をウミガラスといい、ペンギンによく似た白と黒の海鳥です。直立して一歩一歩よちよち歩き、背の高さは40cmぐらいです。でも、その鳥はもうほとんど見られなくなってしまいました。

天売島が「オロロン鳥の島」と呼ばれたのは、もちろんウミガラスがこの島に数多くすんでいたからです。もっとも古い記録によると、1938年には4万羽（文部省告示第292号、1938）とされ、この年に天売島は国の天然記念物に指定されました。そのときの官報に記されていたのです。その後、1963年に8000羽（黒田、1963）、1972年に1117羽（環境庁、1973）と激減するのです。

私は残念ながら、ウミガラスが鈴なりだった当時を、写真でしか見たことがありません。私が天売島を初めて訪れたのは昭和57年。その当時、すでに500羽近くまで減少していました。断崖の西海岸に屹立する屏風岩、カブト岩、そして、その対崖で繁殖していたウミガラスは、年を追うごとに私の目の前から消えていったのです。



ウミガラスの卵



サハリン チュレニー島のウミガラス

その原因はさまざま考えられていますが、1960年代から1970年代に、島近海でサケ・マス流し網漁が盛んだったことが主な一因にあげられます。流し網は効率よく魚を捕ることができましたが、そのかわりウミガラスも一緒に絡まり、おびただしい数が水死したといわれています。こうして数を減らしたウミガラスは、天敵のオオセグロカモメやハシブトガラスに卵や雛を奪われやすくなり、減少にますます拍車がかかっていると推測されます。天売島以外にも北海道の数島でウミガラスは繁殖してしまいましたが、同じような原因で絶滅に追い込まれ、今では天売島が唯一の繁殖地になってしまいました。

1995年の調査ではかろうじて20羽が確認されたのみで、断崖の2カ所で細々と繁殖しているに過ぎません。でも、まったく希望がないわけではありません。国や道、そして地元羽幌町が進めてきたデコイ（鳥模型）による保護対策が、少しずつ成果を現してきたのです。

かつての繁殖場所に取り付けたウミガラスのデコイが本物を誘い込み、繁殖を始めて2年がたちました。繁殖地付近の漁網の問題、増加する天敵のオオセグロカモメなどの難題を現在も抱えています。それらを解決していくことでウミガラスを絶やさずにすむかもしれません。

世界最大 40万羽のウトウ繁殖地

天売島には、とても奇妙な海鳥がすんでいます。日中は全く姿を見せず、薄暗くなると海から姿を現し、地面の巣穴に身を潜めるのです。その鳥はウミガラスと同じウミスズメ科で、ウトウといいます。約40万羽が繁殖し、天売島は世界最大級の繁殖地なのです。

ウトウはハトぐらいの大きさの海鳥で、腹部が白い以外は身体全体が黒です。とても愛嬌ある顔つきで、オレンジ色の上嘴の付け根に突起があり、目の上と下に白い飾り羽がすうっと後ろに向かって伸びています。これらの特徴は繁殖期だけのもので、秋と冬には見られません。

さて、天売島で圧巻の光景といえば、私は迷わずウトウの帰巢シーンをあげます。

夕方、巣穴の開いた斜面で待っていると、日没の15分後ぐらいに海の彼方からこちらへ迫る鳥影を発見できるでしょう。その数は時間の経過とともにどんどん増え、まるで空から鳥がわき出てくるように見えてきます。

斜面に着地したウトウは、いつの間にか自分の足元まで忍び寄っていて、目と鼻の先で何羽も観察できるのです。

ウトウの巣穴が広がる斜面





ウトウ (魚をくわえた)

5月中旬から7月中旬ぐらいにかけて、ウトウは巣穴の雛に魚をくわえて戻ってきます。時には、嘴いっぱい20匹以上もくわえていて、見る人を驚かせることもあります。

ウミガラスもウトウも、天売島にやってくるのは3月から8月ぐらいまでの繁殖期。それ以外は陸に上がることはありません。つまり、ウミスズメ科の海鳥は、卵を産んで雛を育てるために陸地を使うのです。それ以外の生活場所は、すべて海なのです。

したがって、彼らの身体づくりは、陸上よりも海に適応しています。足は身体の後方についていて歩くときは不格好ですが、海上を泳いだり潜ったりするときには大いに役立ちます。また、翼は飛ぶためだけでなく、海中で羽ばたく道具でもあります。翼は形も面積も潜水に適していて、ウミスズメ科の海鳥は海中を縦横に潜ることができるのです。それがかえって、漁網などにかかりやすい皮肉な結果になってしまいました。



オオセグロカモメのペア

増加し続けるオオセグロカモメ

ウミガラスのように激減した海鳥もいれば、オオセグロカモメのように増加傾向にある海鳥もいます。

オオセグロカモメは天売島の生物の中で食物連鎖の頂点に立ち、ウミガラスばかりでなくウミネコ、ウトウなどの雛を食べます。また、人間の捨てた残飯類や、港などに放置された魚なども好んで食べます。オオセグロカモメが増えるのは、こうした人間が出したゴミがオオセグロカモメの繁殖を助けるためだ、と指摘する科学者もいます。

オオセグロカモメが増えると、いったい天売島の海鳥へどんな影響があるのでしょうか。当然、ウミガラスやウミネコなどの食われる側は、繁殖成功率が悪くなります。それは直接、成鳥（親鳥）数に反映され、個体数の減少につながっていきます。数のバランスが一度崩れると、強いものは増え続け、弱いものは減り続ける現象が止めどなく続いてしまうのです。

1963年には50つがいだったオオセグロカモメは、1995年には何と1000つがいにまで迫り、バランスの崩壊は加速度をつけて進む一方になってしまいました。

天売島の海霧夕景



天売島は「小さな地球」

天売島には、これまで紹介した他にウミネコ、ケイマフリ、ウミスズメ、ウミウ、ヒメウが繁殖しています。ウミスズメ、ヒメウも、天売島が日本唯一の繁殖地です。天売島は、こうした貴重な海鳥の姿を手取るように観察できる、世界有数のフィールドです。

島に生活する人たち、そして、海鳥たちを育む豊かな自然が、どうすれば共生できるか知恵を出し合うことは、「人間と自然との共生」という人類永遠のテーマを考えることと同じです。つまり、天売島は地球の縮図、「小さな地球」なのです。私たち人間の勝手さで、海鳥たちがすむ多様な自然を失ってはいけません。

ケイマフリの求愛





初夏の雨竜沼湿原

花のパレット・雨竜沼湿原

佐々木純一

雨竜沼湿原までの道すがら

6月初旬、暑寒連峰の残雪が幾可学模様を織りなす頃、湿原にも春が訪れます。南暑寒荘より4kmの道すがらカタクリ、ツバメオモト、ミヤマスマレやスプリング・エフェメラルの仲間達が迎えてくれます。ダケカンバの奇妙な樹勢を横目に剣竜坂を登ると、かいた汗も忘れて楽しいチシマザクラのお花見です。湧水は冷たく喉を潤し、板状の玄武岩を敷きつめた坂を過ぎると暑寒連峰を背に雄大な湿原が目の前に飛び込んできます。

途中、白竜の滝の岩壁は柱状節理をなしアサギリソウ、ダイヤモンドソウ、チシマゼキショウが生育し、湿原までのアプローチには多くの花が見られます。エンレイソウ、マルバキンレイカ、サンカヨウ、ヒメゴヨウイチゴ、タチカメバソウ、タニウツギ、エゾアジサイ、ツルアジサイ、エゾトリカブトなどのほか、珍しい花でエゾノチャルメルソウ、シロバナエゾアジサイ、オオバミゾホオズキの群落も見のがせません。

エゾアジサイ



エゾノチャルメルソウ





ミズバショウ



ヒメシャクナゲ

早春の湿原

湿原の雪も融け、白いミズバショウの群落は時に水中花の如く沢の中で咲き、赤茶色のザゼンソウ、黄色はエゾノリュウキンカが長い眠りから覚めた湿原に早春の息吹を告げます。歩く先々にショウジョウバカマが咲き、ヒメイチゲ、エゾイチゲ、ミツバオウレンが白い可愛い花をつけ、エゾカンゾウ（エゾゼンテイカ）、タチギボウシ等も芽生え、ホロムイイチゴ、オオバナノエンレイソウの白、ヒメシャクナゲはピンクの鈴を鳴らし、オオバタチツボスミレ、森の貴婦人シラネアオイが咲き、広い湿原です。植生の違いなのでしょうが、若草色とまだセピア色がはっきりと分かれ、これも自然の織りなす湿原風景なのです。ワタスゲは白い花穂とは違いまだ黄色、シナノキンバイソウもまだ蕾です。

今はまだプロログ、静かな湿原です。融雪水で満たされた池塘に暑寒が映り、早春の花と池塘の造形美を堪能できる季節です。



シラネアオイ



春の湿原



ワタスゲ

花のパレット

湿原の初夏は7月。湿原一面は白いベールに包まれ神秘的な朝を迎えます。朝露に濡れた白いワタスゲの穂は寂しくゆれ、木道沿いにはシラネニンジン、イワイチョウ。大きく蛇行するペンケペタン川が霧の流れの中、見え隠れし、陽が昇るとベールはどこかに流れ、そこは黄色のジュータン、エゾカンゾウの大群落です。ワタスゲの穂は風にたなびき、湿原は若草色のパレットに思い思いの色をちりばめ、大パノラマを描いています。

多種のミズゴケから形成される高層湿原はスポンジの様に水を貯え、モウセンゴケが群生し、ツルコケモモが這い、そのピンクの花はとんがり帽子。そしてホロムイイチゴ、ヒメシャクナゲ。花ばかり見ていると木道を踏みはずしてしまいます。



エゾカンゾウ (エゾゼンテイカ)



ツルコケモモとモウセンゴケ



トキソウ



ハクサンチドリ

コツマトリソウ、トキソウの清楚なピンク色、赤紫のアクセントはハクサンチドリ、黄緑色で目立たないホソバノキソチドリ、シナノキンバイソウ、ミヤマキンポウゲの黄色、細流沿いに並び威風堂々としたコバイケイソウ、ピンクの群落はエゾノシモツケソウ、エゾクガイソウは紫の花を天高く突き上げ、エゾノサワアザミ、ミヤマセンキュウ、カラマツソウ、シオガマギク、風変りなクロバナハンショウヅル、ミクリゼキショウ、ミタケスゲ、イワノガリヤス、ヌマガヤ、ヨシ、ヤチスゲ、ホロムイスゲなどの植物が競って生育しています。



コバイケイソウ



ヒオウギアヤメ



エゾノシモツケソウ

そしてエゾカンゾウが終りを告げる頃、湿原の趣も変わり、黄色やピンクのパレットは紫色へと移ります。タチギボウシが群落をなし、ヒオウギアヤメ、サワギキョウが池塘の周りに咲きます。エゾノホソバトリカブトは^{エボシ}烏帽子を付け、クルマユリ、ハクサンボウフウ、ヤマドリゼンマイなどが色どりを添え、シロバナタチギボウシも見られ、まさに花の楽園です。



エゾクガイソウ



池漥とペンケペタン川

湿原の魅力に池漥はかかせず、150ヶ所はあろうかという池漥も円形、長形、ヒョウタン形、池漥複合体、様々な形をしています。ミズゴケで盛り上がり迷路の様につながった指紋状池漥などは天水だけがたよりで貧栄養的な条件となり、その中でモウセンゴケ、ホロムイソウ、ミカツキグサなどが生育しています。水は泥炭の為、茶褐色をしておりpHも酸性を示します。

浮葉植物は紺碧の空を映す水面に白い宝石をちりばめた水の精エゾノヒツジグサ、道内でも生育地が限定され、黄色に紅をつけた稀産種オゼコウホネが主でこの群落は湿原全体に渡り、特筆される景観でしょう。大きな池漥は周囲50mを越え、浮島も周囲が20mはあります。湿原内に10個ほどある浮島にはサワギキョウなども咲き、静かな湿原の中で夢幻的存在です。

大沼テラスの池漥にはカキツバタの群落です。芸術的にS字状に並び、一切の虚飾をすてたこの花だけでも雨竜沼湿原は忘れられない思い出となるでしょう。



エゾノヒツジグサ



オゼコウホネ



サワギキョウとオゼコウホネ

ホソバタマミクリの細いリボン状の葉は風まかせ。暑寒連峰を、そしてエゾカンゾウ、タチギボウシ、サワギキョウを円鏡に投影する池溇。オオルリボシヤンマ、エゾルリイトトンボが水面に波紋を広げ、湿原の中央を悠久の流れでペンケペタン川が千曲に蛇行し、カルガモ親子も仲良く泳ぎます。浅瀬にはミツガシワ、イワイチョウが群生し、コタヌキモが咲きフトヒルムシロが漂い、ホザキノフサモは水面に林立して突き出ています。広い湿原にはヌマガヤが風にそよぎ、ここだけ時の流れが止まっているようです。

カキツバタ



ホザキノフサモ





湿原全景



イワナシ

展望台から

再び南暑寒岳への登りが始まり、20分も登ると湿原を一望できる展望台につきます。遠くは大雪山連峰を、眼下には緑の湿原と池漥、この手の中に雨竜沼湿原があるのです。

この道すがら6月下旬頃、淡いピンクで透明感のあるイワナシが咲きます。このイワナシは道南地方と増毛山系に隔離分布する植物です。

ウラジロナナカマド、ミヤマホツツジ、イワツツジ、チシマヒョウタンボク、ミネカエデ、オガラバナなどの小低木、ヒメギフチョウの食草でもあるオクエゾサイシン、ノウゴウイチゴ、コミヤマカタバミ、エゾノレイジンソウ、タニギキョウ、コモチミミコウモリ、エゾボウフウ、オオバセンキュウ、ツルリンドウなど、チシマザサの根元や小沢沿いに楽しめます。

エゾオヤマリンドウの咲く頃

お盆を過ぎると湿原はもう秋の装いです。色どりを添えた花たちも果実や種子と色、形を変え、最後の色エゾオヤマリンドウが咲き始めます。コガネギクが咲き、ナガボノシロワレモコウは白い穂を垂れ、ウメバチソウが満開の頃、名残り惜しく、エゾノサワアザミ、タチギボウシが咲いています。ホロムイソウ、エゾカンゾウ、コバイケイソウも茶色に結実し、エゾオヤマリンドウだけが蘇やかに咲いています。湿原の1年を締めくくるこの紫の花、乱舞するアキアカネと共に秋の空に映えます。

時は経ち、降霜を迎えると雨竜沼湿原の花のパレットは終りを告げます。虹のように季節毎に色を変えた湿原も最後は同じ紫でほんの短い夏が終わります。

晩秋……冬を待つ

登山路の木々が紅葉した頃、色鮮やかに私達を楽しませてくれた緑の湿原はセピア色と姿を変え、深い眠りに入り、白い季節を迎えます。ヌマガヤは陽光で薄く輝き、わずかにチングルマの紅葉、ツルコケモモの赤い実がミズゴケの上に浮かび、タチギボウシ、エゾカンゾウの花茎だけが名残りを留め、変わらないのは水を満々と貯めた池塘だけで、暑寒の山々を映し出しています。

私達の雨竜沼湿原

この湿原は約100haあり、道内では最大の山岳湿原を形成しています。植生も高層、中間、低層湿原が混在し、特産種はありませんが約150種の植物が生育しています。この広い中、湿原には湿原林がなく、低木のミネヤナギが川沿いに生育しているだけで、たった1本、5m程のダケカンバがポツンと立っています。

散策していて何か気づきませんか？。僅か1～2mしか離れていない池塘の水位が異なる事を。泥炭層のため、お互いに水の浸透がないのです。

湿原には木道が設けられ1周りでできますので、是非ゆっくりと、仲間達との語らいを楽しんで頂きたいと思います。時の経つのを忘れ、皆さんの瞳だけで湿原の美しさを盗んで下さい。以前は生育していた花も盗掘により消滅した種もあります。約1万年前から創り出された湿原です。時の変遷は止められませんが人為的な変化は私たちの気持次第です。年間6万人が訪れる今、あるがままの自然はそのままに、子供達に残しましょう。自然を愛する1人として。

私も山好きの仲間達による“雨竜沼湿原を愛する会”で湿原の植物・鳥・昆虫の調査、環境美化（ゴミヒロイ）などを行っています。

一度散策したらまた訪れてみたい、そんなロマンのある雨竜沼湿原の魅力さんがくを山樂散歩がくし。、そして植物楽者になりませんか。

エゾオヤマリンドウ



秋の湿原





初夏の雨竜沼湿原と暑寒別岳

昆虫たちの世界

久万田敏夫

昆虫調査の未開地・暑寒別山塊

北海道が1984年（昭和59年）に実施した暑寒別・天売・焼尻国定公園の総合調査では、暑寒別山塊から総計447種の昆虫が記録されました。1989年に出版された日本産昆虫総目録によれば、日本産の昆虫は28,837種、そのうち北海道に分布するのは9,878種となっています。

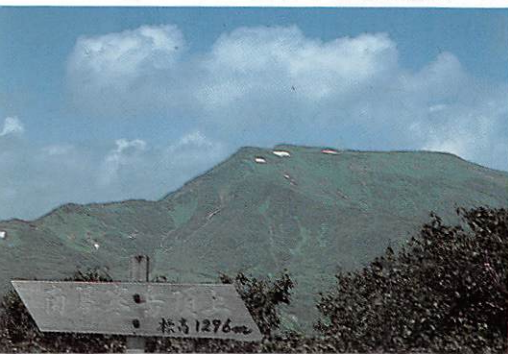
これと比較してみると、暑寒別産の昆虫は、日本産のわずか1.5%、北海道産の4.5%にしかすぎません。この数字は、暑寒別の昆虫相の貧弱さを表わしているのではなく、調査が不十分であることを示しているように思います。暑寒別山塊は、昆虫類に関するかぎり未開の宝庫で、今後の調査で思いもかけない種類が発見される可能性を秘めています。

北海道の尾瀬ヶ原・雨竜沼湿原

暑寒別山塊の中腹、標高850メートル付近に雨竜沼湿原があります。湿原には多数の池塘が散在し、規模の大きさや湿原植物の豊かなことなどから、北海道の尾瀬ヶ原とも呼ばれています。

南暑寒別岳を背景に広がるお花畑は、四季折々に花の主役を替えながら、すばらしい眺めを展開してくれます。特に夏のタチギボウシの群落は、湿原を紫色に染めて、訪れる人を夢の世界へ誘ってくれます。

暑寒別岳



タチギボウシの咲く雨竜沼





池澁の水面、イトトンボ類が生息する

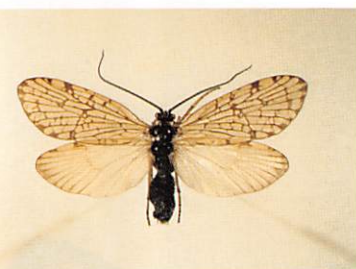
雨竜沼のトンボ類

湿原の特徴的な昆虫はトンボでしょう。尾瀬ヶ原では、これまで44種のトンボが記録されていますが、残念ながら雨竜沼からは9種しか発見されていません。今後の調査でまだ発見される可能性はありますが、尾瀬ヶ原よりかなり少ないことは確実です。トンボ類は本来南の昆虫のため、北へ行くほど種類が減少するのはしかたないとして、やはり尾瀬ヶ原より環境が単純であることが、トンボ相の貧弱さの要因だと思われます。

雨竜沼から記録されたトンボは、アオイトトンボ、キタイトンボ、ルリイトトンボ（北海道産はエゾルリイトトンボとして本州産と区別されていましたが、最近では区別されていません）、オオルリボシヤンマ、カラカネトンボ、コエゾトンボ、アキアカネ、ノシメトンボ、カオジロトンボの9種類です。これらはコエゾトンボを除いて、尾瀬ヶ原からも記録されています。

9種のうち、湿原の池澁や付近の流域で発生すると考えられるものは6種で、カオジロトンボが最も個体数が多く、次いでキタイトンボ、ルリイトトンボ、カラカネトンボの順でした。コエゾトンボ、ノシメトンボ、アキアカネは一時的な飛来種と考えられ、特に後の2種は夏季に高山へ移動して秋に平地にもどる習性があり、暑寒別岳でも低地から高地まで、夏山のシーズンにはいたる所で群飛が見られました。

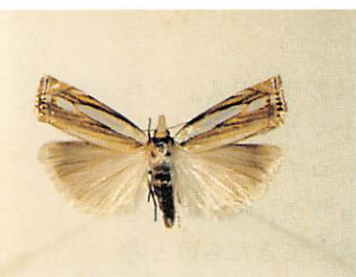
木道の柵に止まったかと思うと、すぐにせわしく飛び立つカオジロトンボや、沼の岸辺の草むらの間を静かに飛んでいるルリ色のイトトンボ類を眺めていると、登山の疲れも忘れてしまいます。



湿原の昆虫① アミメトビケラの1種



湿原の昆虫② オゼメクラカメムシ



湿原の昆虫③ ヒメギンスジツガ



モウセンゴケを食べるマダラトリバガの成虫
(雨竜沼産)

モウセンゴケを食べるマダラトリバガ

雨竜沼では、トンボ類以外に池塘や湿地植物に依存して生活する特徴的な昆虫たちが発見されています。

水生昆虫ではヒメアメンボ、トビケラ類、ミズスマシなどが知られ、アミメトビケラの1種は日中活発に湿原を飛翔し、この湿原を代表するトビケラです。湿った地表面を歩くオゼメクラカメムシ、ヒルムシロを食べるギンモンミズメイガ、ミズゴケやイネ科植物に依存しているダイセツツガ、ヒメギンスジツガ、イグサヒメハマキなども湿原の昆虫です。

特に興味があるのは、この湿原でマダラトリバガが見つかったことです。このガの幼虫は、食虫植物として有名なモウセンゴケだけを食べて生育します。雨竜沼では幼虫は確かめられていませんが、成虫は池塘の淵に群生していたモウセンゴケのまわりを、日中ゆるやかに飛んでいました。前翅の長さが5ミリメートルほどの小さいガですが、良く見ると前後翅とも細い切れ込みがあり、鳥の羽毛のような形をしていて、「トリバガ」の名前の由来がわかります。

モウセンゴケの葉には細長い腺毛が密生し、その先に粘液をつけていて、止まった昆虫をとらえて体液を吸収します。時にはカオジロトンボのような大形の昆虫までがこの粘液につかまります。モウセンゴケは虫を食べる植物で、虫に食べられるとは考えられないことですが、マダラトリバガの幼虫はこのモウセンゴケの葉を腺毛とともにばりばりと食べてしまいます。



ベニヒカゲ（雨竜沼タイプ）雨竜沼産



ベニヒカゲ（普通タイプ）雨竜沼産

雨竜沼タイプのベニヒカゲ

雨竜沼で見かけるチョウの姿は、あまり多くはありません。それでも、エゾスジグロシロチョウ、キアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、ルリシジミ、ウラギンヒョウモン、コヒオドシ、コチャバネセセリなど、道内のいたる所でごく普通に見られるチョウが、吸蜜に花を訪れていました。その多くは周辺の林地から侵入してきたものと考えられます。

そんな中で、8月の湿原で比較的多く飛んでいたのはベニヒカゲでした。黒っぽい翅に赤い斑点が目につきますが、どちらかと云えば地味なチョウです。幼虫はカヤツリグサ科のカンスゲなどを食べて生育するので、この湿原を住み家に行っていることは確実でしょう。ベニヒカゲは地方によって斑紋が変化していて、道内でもいくつかの地域型に分けられています。雨竜沼の個体の中には、前翅の赤色紋が後方に向かって細くなり、その中の眼状紋が消失する傾向があり、雨竜沼タイプと呼ばれています。長い間周辺の個体群との交流が少なく、雨竜沼だけで繁殖をくり返してきたため、このような特有な変異型が出現したのでしょうか。

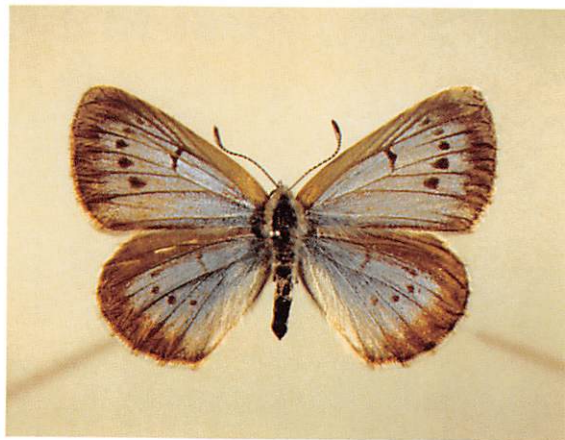
天売島と焼尻島のチョウ類

日本海に浮かぶこの二つの島は、暑寒別山塊以上に昆虫の調査が遅れています。利尻島や礼文島からは多くの報告が発表されているのとは、非常に対照的です。それでもチョウ類は比較的によく調査され、焼尻島からは28種、天売島からは14種が報告されています。

二つの島は地形や大きさなど非常に似ていますが、チョウの種類は、天売島からは焼尻島の半分しか報告されていません。そして種類構成を調べてみますと、焼尻島からはアカシジミ、ミドリシジミ、エゾミドリシジミなど樹木の葉を食べる種類が多く発見されているのに対して、天売島からはこれらのチョウは全く報告されていません。

焼尻島にはイチイの天然林があって、古くから大切に保存されてきました。この林には他の樹種も生育して、周辺の草地とともに多様な環境を作っています。一方、天売島にはそのような林は見られず、一面に草地化した単純な環境が広がっています。明らかに、この環境の違いが、チョウの種類構成の違いをもたらしていると思われれます。

調査の時点で焼尻島では発見できなかったゴマシジミが、天売島では多数生息していました。この幼虫はシロワレモコウを食べて生育します。天売島では、放置したまま草地化した畑の跡にシロワレモコウが群生していました。道内では草地の田畑化に伴って、ゴマシジミの生息地は急減し、今では限られた地域で細々と生きのびている状態です。



ゴマシジミ (天売島産)



天売島の森林の再生に向けて

島の水と森づくり

東 三郎

昔も今も生活には水が一番

羽幌港から高速艇に乗ると33分で焼尻港に着きます。旅行鞆や釣り具を持った客が急ぎ足で船を離れます。旅館や民宿の出迎えには思い思いの旗やプラカードが立ち並んで、島ならではの優しい気分が伝わってきます。また裏山は鬱蒼とした森になっていますから、上陸すると小さい島という感じはなくなり、普通の山林を歩いているように思われます。

1984年の夏は全道的に雨が少なく、平年値の約半分でしたから、各地で水不足が問題になりました。私は前年から「都市と生活用水」をテーマに、とくに森の保水性について研究し始めたところでしたから、ここぞとばかり焼尻島を訪ねました。

この島には天売島と違って約100ヘクタールの自然林が残されています。白亜の灯台を西へ回り込んで少し行った下り坂の左手に、焼尻第一遺跡の標柱が建っています。山本の沢というところですが、私たちは遺跡の沢と呼んでいます。8月4日海辺に降りて沢水の量を測りました。流速と流水の断面積に係数を掛けて計算しますと流量が分かります。渇水期の流量は少ないですから毎秒何リットル(1/5)で表します。この時は毎秒1.95リットル、1日で168.48トンになりました(写真1、2)。

写真1 焼尻島遺跡の沢



写真2 遺跡の沢の渇水流況(1984. 8. 4)



長い間雨が降らなかったのに、こんなに沢の水が流れているのは不思議です。ちなみに1人1日0.3トンの水を使って生活していますから、この168.48トンは約560人分になります。じつはそれから10年経って1994年、今度は全国的な水不足の夏が訪れました。私たちの研究はその後も続いていましたので、8月5日この沢の流量を調べて驚きました。測定誤差も入っていると思いますが、この時の流量は毎秒1.97リットルで10年前とほとんど同じでした。さらに1995年8月5日の流量は毎秒1.93リットルでまたまた大差のないことが分かりました。先住民たちはすでに涸れる心配のない水辺に生活の拠点を作ってきたのです。この沢の源は見事な森ですから、世に言う水源林とはこのことかと納得させられました（写真3）。



写真3
焼尻島のオンコ林

風に負けない森づくり

焼尻島の北海岸にササ原が広がっています。かつて森から木材や薪が採られ、一度は畑に使われたところですが、その後放棄されたために荒れています。島の生活を支えるには先ず水を確保しなければなりませんから、森の再生が必要です。しかしこの辺りの台地は年中風が強く、植林の成果があがりません。そこで私たちは苗木を自立させること、そして樹木同士が助け合って緑の構造物に成る方法を研究してきました。冬の雪を引き留めて地表を暖かく守ること、春先の乾いた冷たい風を和らげて苗木の生長開始を早めること、この二つを解決するためにハードルフェンスを考案しました。工事は1986年の秋に始まり、5年間でヤナギ（埋枝工）・ケヤマハンノキ・カシワ・グイマツ・アカエゾマツが植えられました。いずれも順調に育ってフェンスの高さ1.5mをはるかに超え若い森になってきました。やがて海鳥のねぐらになることでしょう（写真4. 5. 6）。

港の滝に水が戻る日

羽幌港から高速艇で直行すると42分で天売港に着きます。船着き場の左手に海岸台地の窪みが目に入ります。辺りに大きな樹木がないために、焼尻島に比べると寂しい風景です。ここでも釣り客や観光客が大勢降ります。旅館や民宿の出迎えも賑やかです。じつはこの窪んでいるところが、やがて観光の目玉になるかもしれない天然の滝です。島では弁天滝の沢と呼ばれている溪流の出口に当たります(写真7)。

残念ながら普段は落ちる水がなくて滝らしくありません。かつては水音高く飛沫をあげていたのかもしれませんが、今ではカモメが群れている程度です。この滝の水が涸れてしまったのは、上流部の森が伐採されて雨や雪の受け皿が変質してしまったためだろうと思われます。留萌支庁林務課の治山工事で少しずつ森が復元してきました。

その効果が1994年の渇水期に少し現れてきました。それは10年前の渇水期の流量の4倍でしたが、まだまだ毎秒0.04リットル、日流量3.5トンしかありません。できれば貯水池を設け船が入港する毎に「観光放流」でもしてみたいところです。貯水池があれば海鳥たちの憩いの場にもなるでしょう。

写真7 天売島弁天滝の遠望



写真4

ハードルフェンスの設置状況 (1988. 2. 17)



写真5 焼尻島植栽後2年目 (1988. 9. 15)



写真6 焼尻島植栽後5年目 (1991. 7. 22)





写真8 井天滝の沢上流の土壌断面



写真9 1965年施工のヤナギ林 (1993. 8. 30)

雨と雪は森から井戸へ

干害防備林造成事業として1950年代後半から1960年代にかけて、クロマツ・ニセアカシア・欧州アカマツ・バンクスマツなどが植林されましたが、なかなか定着しませんでした。その主な原因は、生長開始期の風対策が十分でなかったのと、島に自生している樹種をうまく適用する考え方がなかったからです。1970年代には寒冷・乾燥に抵抗性のあるヤナギ類の先行緑化が採用されて、立地条件が次第に改善されるようになり、停滞気味であったトドマツやグイマツの復活が見られるようになりました。なお砂漠緑化に有効なケヤマハンノキ林は目を見張るほど良く生長して、土壌にはミミズが生息する状態にまでなりました。目下樹高は7mから10mになって分厚い森の様相になりました(写真8. 9)。

ところで1965年造成技術の現地検討会で島に渡った時、この水不足の土地に植林すると、樹木が大量の水を吸収して逆効果になるのではないかと心配しました。当時旅館では満足に風呂に入れなかったし、飲み水も窮屈であったことを忘れることはできません。そしてこのことは観光誘致にマイナスであり、あまり宣伝して欲しくないと、しばしば関係者に言われたものです。

それから30年経って1995年現在、旅館にはシャワー付きの洗面台がずらっと並べられるようになりました。ポンプ小屋を案内してくれた旅館の主人は、メーターを指さしながら、1994年の渇水期にも支障なく毎日80トンの水を汲み上げ、観光シーズンを無理なく過ごしたと説明してくれました。そしてこのような恩恵に浴しているのは、植林によって森が復活し、水源がかん養されたためだと力強い証言がありました。確かにゼロからプラスへ、しかも極めて良質の水が得られたことは、ここが小さい島だけに説得力があります。

島の南部相影地区鶴田の沢で1980年から水源林造成が行われています。ここには流量観測所が設けられ、雨量と流量の関係が調べられていますが、1984年夏の流量は毎秒0.053リットル、1日の流量は4.6トンでした。その後植林の効果もあって流量は徐々に増加しましたが、10年後の1994年の渇水期には再び減少し、毎秒0.02リットル、1日僅かに1.7トンになりました。

写真10 鶴田の沢流量観測所



写真11 ヤナギ埋枝工2年目の生長状態 (1984. 7. 16)



森の再生によって水源が潤ったと思ったのはつかの間で、植栽後10年余りの若い森の保水力はあまり大きくないことが分かりました。それから1年経って1995年の渇水期の流量は毎秒0.06リットル1日5.2トンになり、回復しつつあります（写真10. 11. 12）。失われた森の再生には一応の目処がたちましたが、水源をかん養するにはなお長い歳月が必要であるといえるでしょう。かつて日本海航路は北前船の往来によって賑わいました。今また人々は島にロマンを求めて訪れますが、きれいな水がなければ本当の自然を満喫できないし、海鳥や魚類との共生も難しいでしょう。訪れる人々にも一杯の水と島の森が深い関係にあることを認識し、新しい水文化の創造に参加していただきたいものです。

写真12 鶴田の沢水源林（1990. 6. 28）





暑寒別川上流の流れ

暑寒別川の魚たち

大久保進一

増毛町を流れる暑寒別川は、日本海へ突き出た増毛山地の暑寒別岳周辺を源とする流程26kmほどの川で、ポン暑寒別川、留知暑寒沢、ニタトコナイ沢などの支流が流れ込んでいます。日本海からまともに吹きつける冬の季節風は、暑寒別岳周辺に大量の雪を降らせるため、暑寒別川の水はいつも清冽で豊かです。暑寒別川は1975年から保護水面に指定され、周年水産動物の採捕が禁止されているので、比較的札幌市に近いにもかかわらず、釣り人が訪れることもなく、アメマスやヤマベ（サクラマス）などの渓流釣りの対象となる魚も数多く生息しています。暑寒別川はたしかに豊かな自然が残る川なのですが、本支流の所々に砂防ダムや治山ダムが築かれており、そのほとんどに魚道が付いていて、魚たちにとっては快適な環境とは言えない部分もあります。ここでは、この川に生息する魚たちの一部を写真を交えて紹介したいと思います。



サクラマスの捕獲作業



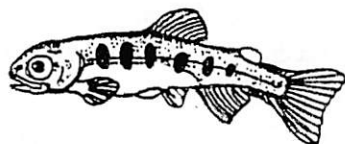
暑寒別川の砂防ダム

暑寒別川に生息する魚たち

私たち水産孵化場では、暑寒別川で様々な調査を行っています。その調査の過程で確認した魚は次の15種です。

カワヤツメ、スナヤツメ、カラフトマス、サケ、サクラマス、ニジマス、アメマス、オショロコマ、フクドジョウ、ウグイ、メナダ、ウキゴリ、ヨシノボリ、カンキョウカジカ、ハナカジカ

この中で一生を川（淡水）の中で過ごす魚はスナヤツメ、フクドジョウ、ハナカジカの3種で、そのほかの魚はサケやサクラマス、アメマスなどのように一生の中で海と川とを行き来して生活する魚です。日本の淡水魚の種類は研究者によっても異なりますが、およそ140から170種程度と言われていたから、暑寒別川に生息する魚の種類は少ないと言えます。一般に北海道の淡水魚類の種類は本州に比べて貧弱であり、特に一生を淡水で過ごす魚は少ないと言われていたから、暑寒別川もその例外ではありません。



北海道立水産孵化場のシンボルマーク



川へ遡上したサケ (河)

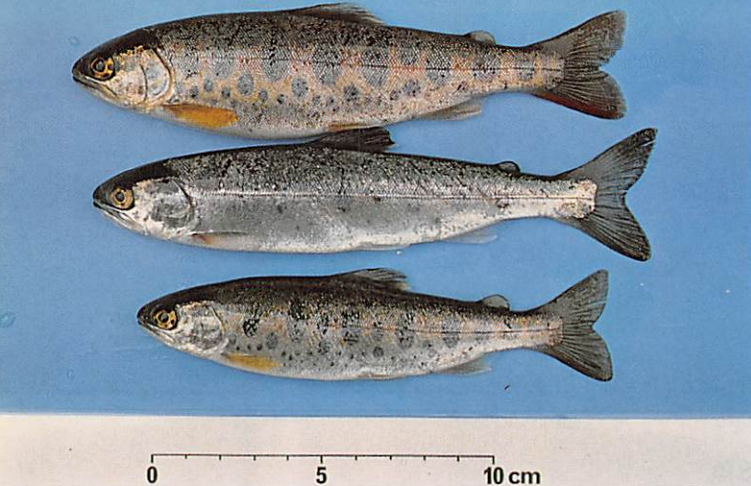
増殖している魚

サケ、サクラマス、カラフトマス

暑寒別川はサケが数多く遡上する川として知られていて、毎年10月には川を遡上するサケを見ようと、多くの観光客が訪れます。暑寒別川の上流には道立水産孵化場増毛支場があり、暑寒別川で採卵したサケの卵を収容して、3月から4月にかけて1300万尾程度の稚魚を放流しています。暑寒別川の今年（1995年12月10日現在）のサケの捕獲尾数(遡上尾数)は45532尾でした。増毛支場ができた1973年のサケの遡上数は345尾ですから、最近の人工孵化放流技術の向上によって暑寒別川のサケがいかに増えたかがわかります。



サケの稚魚 (河)



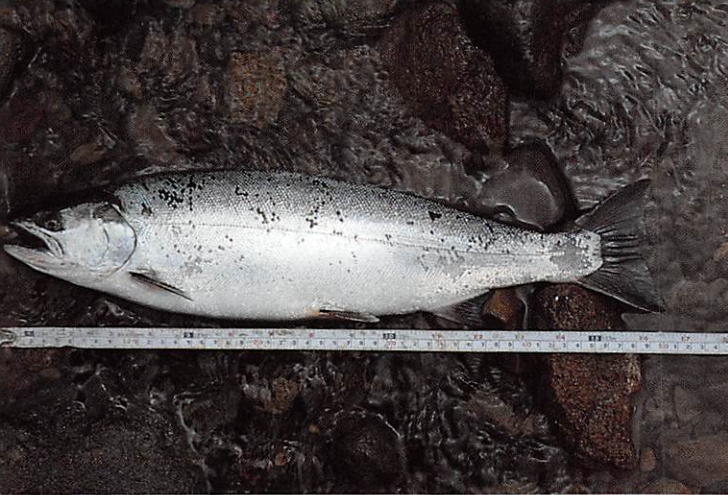
サクラマスの子魚（河）

上：川に残るヤマベ

中：海へ下る銀毛

下：銀毛になる前のヤマベ

サクラマスはサケとは異なり、雪解け増水が終了する前の5月頃から川に遡上し、産卵期の9月まで川の中で過ごします。卵から孵化した稚魚は川の中で1年生活し、一部の雄（ヤマベ）を除いて5月から6月にかけて銀毛になって川を下り海へ向かいます。海で1年間生活した後、再び生まれた川へ遡上します。サケとは異なる生態のため、サクラマスの効果的な増殖方法は確立されておらず、サクラマスの資源は天然の再生産に依存する部分が少なくありません。増毛支場では暑寒別川に遡上するサクラマスの一部（150尾程度）を捕獲して、採卵し、春に稚魚を暑寒別川に放流していますが、暑寒別川のサクラマスのほとんどは人工孵化放流ではなく、天然のサクラマスの再生産に依存しています。そのため、暑寒別川を保護水面に指定することによって、将来海へ下ってサクラマスになる幼魚を保護しています。私たちの調査では、暑寒別川には毎年600尾から1000尾程度のサクラマスが遡上しています。9月になると、本流上流や各支流のあちらこちらでサクラマスが産卵しているのが見られます。

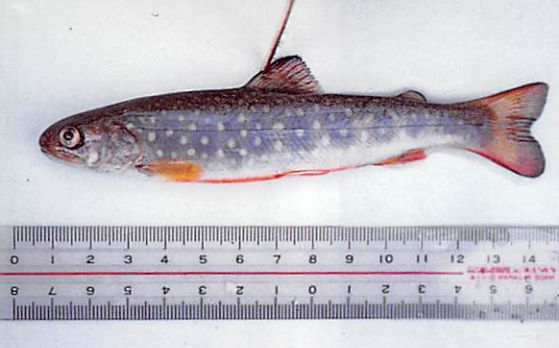


川に遡上したサクラマス（宮）

カラフトマスはサケと同じように卵から孵化すると直ちに川を下り海へ向かいます。1年間海で生活して川へ産卵のため遡上します。カラフトマスはオホーツク沿岸の河川に多く遡上し、日本海沿岸の川への遡上尾数は多くありません。暑寒別川では1976年頃まで増毛支場で稚魚を放流していましたが、その後放流は行われなくなりました。現在でも、サケを捕獲するときにカラフトマスが捕れることがあります。その数は年に数尾程度で、その遡上数は非常に少ないものと思われま

川へ遡上したカラフトマス（鈴）





アメマス (河)

川へ遡上したアメマス (河)



そのほかのサケ科の魚たち

アメマス、ニジマス、オシヨロコマ

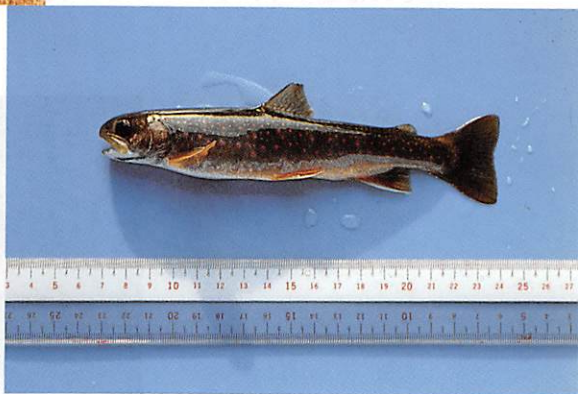
アメマスは溪流釣りの対象として釣り人に人気があり、北海道の河川ではごく普通に見られる魚です。しかし、最近では河川改修やダムの建設、釣り人の増加などでその数が減少しつつあります。暑寒別川には比較的多くのアメマスが下流から上流の広い範囲に生息しています。一部のアメマスは海に下って沿岸で生活する事が知られています。暑寒別川でも、春になると調査の投網に海へ下るために銀毛になったアメマスが入ることがあります。暑寒別川でサクラマスを捕獲していると、春から夏にかけてサクラマスと一緒に海から遡上してきたアメマスが捕れます。海から遡上してきたアメマスは大きいもので尾叉長で60cm程度もあります。

ニジマスは本来北アメリカ原産の魚で日本にはいなかった魚ですが、明治時代にアメリカから移植されて一部の川で定着していることが確認されています。暑寒別川でも下流でニジマスが生息しています。このニジマスは誰かが放流したか、養殖場から逃げ出したものでしょう。ニジマスは数は少ないものの、どうやらこの川で定着して、子孫を残しているものと思われます。

オショロコマは知床半島を中心とした東部地域のほか、大雪山系や南西部のごく限られた水系に生息しています（鷹見ら、1995）。北海道のオショロコマは知床半島の一部を除き一生を川で生活します（写真は一生を川で生活するオショロコマ）。暑寒別川ではオショロコマの生息は確認されていませんでしたが、1984年にサクラマスを捕獲する施設に海から遡上してきたオショロコマ（体長46.5cm）が捕獲されました（齊藤、杉若、1984）。このオショロコマは北海道よりも北に生息するオショロコマが海に下り、暑寒別川に迷い込んだものと考えられます。このような例は道東の忠類川や伊茶仁川で報告があります。



ニジマス（河）



オショロコマ（河）
（一生を川の中で過ごすタイプ、真狩川）



スナヤツメ (河)

そのほかの魚たち

ヤツメ類は原始的な魚で、下顎がなく、口が吸盤状になっています。鰓蓋もなく、鰓を通った水は眼の後ろにある穴から出てゆきます。この穴が眼のように見えるため、「八つ眼」と呼ばれます。暑寒別川では、スナヤツメとカワヤツメの2種がいます。カワヤツメは川で2年間ほど生活して海へ下り、全長50cm程度になって再び産卵のため川へ遡上します。また、蒲焼き、燻製などにして食用にします。スナヤツメは全長20cm程度で一生涯を川の中で生活し、食用にはしません。筆者は暑寒別川でスナヤツメを採集したことはありますが、カワヤツメは見たことがありません。カワヤツメの生息数はそれほど多くはないのでしょうか。

産卵期のウグイ (鈴)



アユ (鈴)



アユは川底の石に付着した藻類を食べて成長します。北海道では天塩川以南の日本海側の川と遊楽部川以南の太平洋側の川に生息しています。本州では釣りや漁業の対象魚として人々になじみの深い魚ですが、北海道では一部の釣り人を除いてなじみのない魚かも知れません。暑寒別川では下流で見られますが、数はそれほど多くはないようです。筆者もかつて暑寒別川で調査中にアユを捕まえたことがあります。ただ、アユの数は年によって変動が大きいようで、少ない年と多い年があるようです。アユは暑寒別川よりも同じ増毛町内を流れる信砂川に多くいるようです。

ウグイは北海道のどこの川でも普通に見られる魚です。コイ科の魚では珍しく、海に下り沿岸で生活することもあります。暑寒別川でも下流から中流付近までかなりの数がいます。

おわりに

暑寒別川における私たちの調査は、サクラマスに関するものがほとんどのため、調査場所や調査時期が限定されています。したがって、これから新たに生息が確認される魚があるかも知れません。

魚たちのためにも、暑寒別川の美しい流れと河川環境がこれ以上変わらぬよう願っています。

注：筆者以外の写真撮影者
(河) 河村 博
(鈴) 鈴木研一
(宮) 宮本真人



マシケゲンゲ (梅沢)

マシケゲンゲの実



草 と 樹

鮫島惇一郎

マシケゲンゲ

暑寒別岳に、増毛山塊のマシケの名を付した植物がふたつあります。マシケゲンゲとマシケオトギリです。いずれもこの山に固有の植物です。

暑寒別岳をはじめ、増毛山塊の諸火山の山域では、高山植物群落が発達する面積は広くありません。しかし、さまざまな形の高山植物群落がみられ、豊かな植物相をつくりあげています。原始相がよく保たれていることから、その保護について、注意深い配慮がたいへん重要になってきます。

オンコの荘

焼尻島は小さな島ながら緑豊かな森があります。ミズナラやイタヤカエデ、ナナカマド、エゾヤマザクラなどを主とした広葉樹林ですが、特徴的なのはかなり多くのオンコ、つまりイチイの木を混じえていることです。林内を散策する遊歩道を西へたどると、眺望の開けた処にでます。そこに展開するのは、背丈は低いのですが数多く枝分かれしたイチイの純林です。みんな古木です。オンコの荘と呼ばれておりますが、島のきびしい環境がもたらした姿なのでしょう。とにかく壮観です。

森の小径



オンコの荘





ドクウツギ



北海道における温帯系植物の分布型
(渡辺定元1960より)

- A: ブナ型
- B: トチノキ型
- C: ドクウツギ型
- D: クリ型
- E: アカシデ型
- F: タニウツギ型

ドクウツギ

イチロベゴロシと、物騒な別名まで付けられているドクウツギという灌木があります。トリカブトやドクゼリと並ぶ、名だたる有毒植物です。熟した果実はおいしそうに見えるので、誤つてこれを食べて命をおとした話を聞いたこともあります。

そのドクウツギを雄冬、増毛や国領で見かけたことがあります。道南ではよく見かける灌木ですが、石狩低地帯を越えて、より北のほうまで生育しているのです。日本海を北上する対馬海流や、冬の多雪に関わりがあると考えられています。ハイイヌガヤ、ヒメヤシャブシ、トックリハシバミ（ツノハシバミの変種）、イワナシ、タチカメバソウ、サワフタギなども同じような分布をしております。北海道における温帯要素のドクウツギ型分布といわれています。

雪と植物

北海道でタケノコといっているのは、普通、ネマガリダケつまりチシマザサの笹の子のことです。味は最高、逸品です。季節がきてタケノコ狩りでよく知られているところは、ニセコ山塊、中山峠、それにこの暑寒別岳のある増毛山塊、比布周辺、宗谷丘陵などがありますが、いずれも日本海側の雪の深い地域です。チシマザサの生育は積雪量とたいへん密接な関係のあることが知られています。

初夏、北海道神宮の札幌祭りの頃、雨竜沼湿原に登ってくると、湿原の入り口、ペンケペタン沢沿いでタカネザクラのお花見ができます。そしてその先、湿原ではミズバショウとエゾノリュウキンカの歓迎を受けるのです。

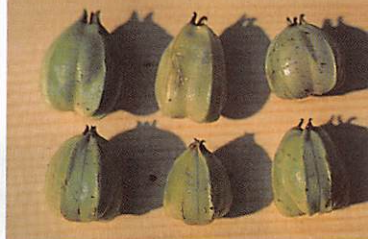
彼方には、まだたっぷりと雪を抱く南暑寒岳、暑寒別岳が並んでおります。雪と水の流れと植物が造り上げた、魅力ある情景です。



焼尻のチシマエンレイソウ



天売のオオバナノエンレイソウ



増毛のオオバナノエンレイソウ

チシマエンレイソウ

ある時、焼尻島の小さな沢へ、オオバナノエンレイソウを調べにやってきました。本土？でみられるオオバナノエンレイソウとはどこか違います。花のときは子房、実ったときは果実の色が濃紅紫色なのです。たまにはウズラの卵みたいに、濃紅紫の斑点が散っているものもあるのですが、ほとんどが濃紅紫色なのです。後になって解ったことですが、この花、チシマエンレイソウと名が付けられていて、オオバナノエンレイソウの変種とされておりました。千島で初めて見つかったといえます。

となりの天売島ではどうなっているのでしょうか？天売島で探してみました。どれもこれもウズラの卵みたいなものばかりです。

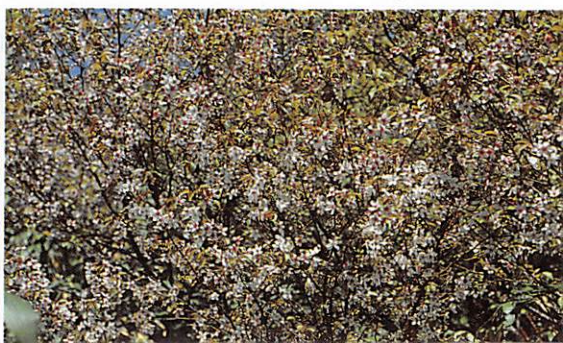
対岸の羽幌、鬼鹿、増毛などでは標準的オオバナノエンレイソウばかりなのに、この小さな島にそれぞれ濃紅紫、斑とそれぞれに個性があるのはなんとしても不思議です。

それともまだ探し方が足りないのでしょうか？

ダケカンバとチシマザサ



タカネザクラ





雨竜沼湿原のオオバタチツボスミレ

執 筆 者

八木 健三	北海道大学名誉教授
寺沢 孝毅	羽幌町天売ネイチャーライヴ
佐々木純一	雨竜沼湿原を愛する会
久万田敏夫	北海道大学教授
東 三郎	森林空間研究所主宰
大久保進一	北海道立水産孵化場
鮫島惇一郎	自然環境研究室主宰
村野 道子	イラストレーター

編集委員

佐藤 謙、福地 郁子、鮫島惇一郎

編集事務局

山辺 巖 (株)北海道自然保護協会事務局

写真提供者

執筆者のほかに 梅沢 俊、鮫島惇一郎

暑寒別・天売・焼尻の自然

1996年3月発行

編集・発行 社団法人 北海道自然保護協会

〒060 札幌市中央区北3条西11丁目

加森ビル5

電話 (011) 251-5465

印刷 株式会社 広報社印刷

〒064 札幌市中央区南8条西10丁目

石黒ビル

電話 (011) 532-8160 FAX 532-9060

北海道自然保護協会